

西鶴作品にみる身体に関する語(二)

計良 吉則

順天堂大学医学部 医史学研究室

『西鶴諸国ばなし』は西鶴の第三作の浮世草子として刊行され、刊行年は貞享二(一六八五)年とされている。西鶴四十四歳の作品で、初版本の体裁は大本五巻五冊から成っていた。

本作品は多くの過去の説話を元に、新たに再生された短編説話集である。その舞台は日本の様々な地方であり、小都市から農村、山村に至るまで多岐にわたる。また、登場人物も武士・商人・職人・農民・僧侶など多彩であるが、町人・農民層と武士層が主流をなしており、当時の職業および身分の平均的な様相を反映しているといえる。

本作品の中の身体に関する語に着目し、それについて調査することは、当時の人びとの身体観を知るうえで意味のあることと考えた。

まず、全身を表すものの中では「身」という語が圧倒的に多く、48か所みられた。「身ふるふ」「捨てし身」「おのが身」「その身」「身に覚え」のように用いられている。また「骨」も5か所みられ、「骨のごとく」「骨をも折らず」のように用いられている。

次に、頭部においては「顔」が最も多く、14か所あり、「顔は乙御前」「顔つき」「黒き顔」のように用いられている。また「頭」は12か所で「あたまをそられ」「頭に引裂紙をつけ」のように用いられ、「頸」は7か所で「女の首」「その首提げて」のように用いられている。

躯幹では「腹」が多く、8か所みられ、「腹這ひにして」「かく腹には子もある」のように用いられ、「腰」も多く、7か所あり、「腰うすびらたく」「腰には藤づるをまとひ」のように用いられている。

四肢の中では「手・指」が極めて多く、56か所みられた。「手ぐりにして」「革柄に手を掛くる時」「手を合せて」「手を引き合ひ」「沖のかたに指さす」のように用いられている。また「足・脚」も比較的多く、18か所みられた。「足音の調子を」「足取りのせはしき」「たやすく足も立たず」のように用いられている。

五孔では「眼・目」が最も多く、35か所みられた。「おのおのの目」「眼ひかり」「目つきもおそろしくて」「眼くらみ」のように用いられている。次に「口」が多く、12か所みられ、「一座口を揃へて」「木の葉の雫を口にそそぎ」のように用いられ、また「耳」「鼻」は「耳の長き女」「鼻ひくう」のように用いられている。

分泌物等では「涙・泪」が多く、7か所みられ、「涙を流し」「泪を洒(こぼ)す」のように用いられ、「血」は6か所あり、「血の流れたる」「人の血を吸ひ」のように用いられている。また、「息」が多く、「息づかひ」「息吹きかくるに」のように用いられていた。

「脈」という語は2か所みられ、「脈にたのみあれば」「脈を見るに……陰虚火動の気色に極まり」があり、「脈」が生命徴候や病気の診断として用いられていたことがわかる。

精神・神経症状に関する語は、「気を取り失ひける」「魂きゆるがごとく」「夢中になって」「心玉をうしなはしける」があり、いずれも意識の消失を意味していた。精神の異常を表したものに、「ぶらぶらとわづらひつきて」「作り髭をさせ、頭に引裂紙をつけ、上下を着し、日中に詫言」がみられた。巻三の「お霜月の作り髭」は、悪質ないたずらをした者たちが、精神異常者を装うことで罰を免れた話であるが、当時においても精神に異常を来した者が犯した罪は、処罰されなかったことがうかがわれる。